

「行為解説」の進行形に関する認知言語学的考察 —行為と意図のメトニミー関係から—

清水 啓 子

1. はじめに

ある言語形式（語彙および文法形式）とそれが表す意味との対応関係を考えると、それは概ね一対多となり、言語形式は多義構造を呈する。ある形式がどの様な多義性を持つのかを記述し、さらになぜそうした多義性を持つのかという理由あるいは動機付けを探ることは、認知言語学が重要視する研究的営みである。英語の進行形構文もその多義性ゆえに多くの研究がなされてきており、様々な洞察深い知見が積み上げられている。本論では、進行形構文を対象とした研究の中で、以下（1）（2）に例示されるような、周辺的ではあるが興味深い指摘がされている「行為解説の進行形（interpretive use of the progressive）」と呼ばれる用法を考察する。

‘Interpretive use of the Progressive’

(1) ‘Were you lying when you SAID that?’

‘No, I was telling the truth.’

(Leech 2004 : 22)

‘The interpretive/explanatory use of the progressive’

(2) When I said ‘the boss’ I was referring to you.

(Huddleston and Pullum (以下 H & P と省略) 2002 : 165)

以下ではまず、「行為解説」機能を持つ進行形の特殊性を示し、伝統的な記述文法における考察から、最近の認知言語学的な分析までの先行研究を概観し、それらの問題点を指摘する。次に、認知文法（Langacker 1991、2008 など）によって提案されている進行形構文を包括的に示すスキーマ的概念構造と自然に合致する説明を提案する。本論では、いくつかの認知言語学的な先行研究（友澤 2002、2008）が主張するような「概念メタファー」に基づく説明に対して異論を述べ、行為と意図の間に成立する「メトニミー的關係」、

「部分と全体というパートノミー構造」という認知的概念に基づいて行為解説の進行形に対する説明を提案する。また、発話行為理論における間接発話行為の解釈プロセスとの並行性を指摘し、行為解説の進行形も間接発話行為も、メトノミー的認知によって話者（行為者）の意図にアクセスしていることを示す。結論として、進行形の行為解説という機能は、進行形構文一般の抽象的概念スキーマを具体化するいくつかの事例が、その特徴的な言語使用環境ゆえに結果として創発的に現れた機能であり、その特異性ゆえに一つの顕著な意味クラスターをなしていると主張する。

2. 「行為解説」用法の特殊性

本節では、進行形構文の様々な用法のなかで行為解説がなぜ特殊であるとされるのかを確認する。進行形のプロトタイプの機能は、ある行為が進行中であることを表す。従って、以下(3)では、「私たちの到着」が成立する時点で、「彼女がコーヒーを入れている最中」であることを表す。従属節の事態と主節の事態の間に、「時間の包含関係 (time-inclusion)」が成立している。また、主節と従属節の事態は、別個に独立した二つの事態である。

(3) When we arrived she was making some fresh coffee.

別個に独立した二つの事態であるということは、(4)のように、従属節と主節の主語指示対象が同一である場合にも成立する。

(4) When he said that, he was smiling.

一方、以下(5)においては、従属節と主節は別個の二つの事態を指しているのではなく、主節の進行形は従属節の事態について解説するもので、つまり二つの事態 (say that と lying) は、同一の事態を指示している。この場合、従属節の事態と主節の事態の間に時間的な包含関係はなく、主節の事態が従属節の事態に対する「時間的枠組み (temporal frame)」となっているわけでもない。

(5) When he said that, he was lying.

このように、従属節の事態を主節が説明しているような解釈がされ、二つの節が同一の事態を言及していること、時間的にも重複する (co-extensive) ことが「行為解説」の進行形の特徴とされる。次節から、主な先行研究を概

観する。

3. 先行研究（1）—認知言語学以前

3.1. 毛利（1980：117-131）

毛利は、進行形の「行為解説」機能を指摘して「行為のいいかえパターン」であり、「いったんAと名付けた行為を別のレベル、または観点からBと名付け、それによって行為Aに評価を与えること」（p.117）であると説明している。

(6) In doing A, he is doing B.

(7) Doing A is doing B.

例文（6）において、Aの内容を解説する際にBの部分に進行形が用いられるのだが、この場合の主節に“doing B”として現れる進行形は「発生的には動名詞」であり、このような人を主語にする進行形構文と、(7)の動名詞を使った構文との混交の結果が行為解説の進行形であろう、と毛利は推測している。つまり、以下（8a）と（8b）において、（8a）では、先行文の表す事態内容を受けた代名詞 *That* が後続文の主語であるため、*abusing* は動名詞であるが、（8b）では、先行文の行為者 *John* を代名詞化した *He* が後続文の主語であるため、この *abusing* は現在分詞と見なされ、進行形述部を形成すると解釈される。

(8a) John did A. That was abusing his position.

(8b) John did A. He was abusing his position.

上の毛利の混交説は、形式的な説明にはなっているが、概念構造の面については何も説明していることにはならない。（8a）の動名詞述部の構文と（8b）の進行形構文では文全体が表す概念構造が異なる。なぜ（8b）の進行形構文が可能なのか、特に先行事態との時間的な関係についての疑問は残る。先行事態と後続事態が同一だとすれば、アスペクト的に不整合なのではないかという問題が残る。

3.2 大江（1982：96-98）

大江も、以下のような例に具体化される進行形の機能についてその特殊性を論じている。

- (9) When you say I deserve a rest, you are saying that my life is over.
 (10) ...if a young woman of twenty-four marries a man close on eighty, it's fairly obvious that she's marrying him for his money. (p.97)

しかし大江はこれらの進行形を「行為解説」用法とは言わずに、「等価の表現」と呼ぶ。二つの出来事が共起することを表す場合に一般的に使われる形式 When (If) S1, S2 (S1 の述部は単純形、S2 の述部は進行形) を修辭的に使って、二つの出来事が「等価 (S1 is (equal to) S2)」であることを表していると主張する。ここで問題となるのは「等価」とは厳密には一体どの様な意味か、ということである。一般的な意味で「等価」を解釈すれば、もし S1 と S2 が等価であるなら、二つの出来事を逆にすることもできるはずである。この場合、(9) は以下 (11) と言い換えても意味が同じになるはずであるが、当然ながら同じ意味を表していることにはならない。

- (11) When you say that my life is over, you are saying I deserve a rest.

このことから大江 (1982) の論考は、毛利と同様に、この用法を進行形構文のひとつの特殊な機能と認め「等価の表現」として取り上げているものの、その言語現象の概念的側面を的確に捉えて記述しているとは言えない。

4. 先行研究 (2) — 認知言語学以降

認知文法 (Langacker 1991, 2008 など) は英語の進行形をその概念構造の側面から分析し、進行形構文の多義構造を包括的に説明している。同様のアプローチから進行形の行為解説用法について認知言語学的分析を試みた先行研究には友澤 (2002, 2008)、長谷川 (2005) などがある。これらの先行研究についてふれる前に、認知文法において進行形概念構造がどう分析されているかを概観しておきたい。

4.1 進行形概念構造

進行形は、動詞が表す事態のアスペクト構造に関わる文法要素である。アスペクトとは、ある行為の時間的側面においてどう視点を取るかという問題であり、全体を包括的に見るなら「完了 (perfective)」アスペクトを取り、行為の時間的內部構造の特定部分に着目するなら、「未完了 (imperfective)」アスペクトを取ることになる。

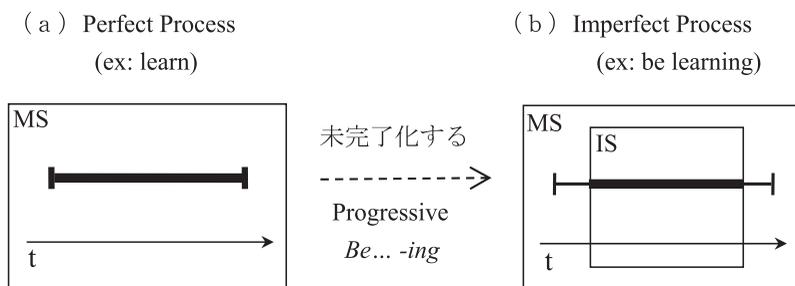
認知文法 (Langacker 1991, 2008 など) に従えば、完了 (perfective) と未完了 (imperfective) との対立は、動詞語彙自体が持つ概念的対立として説

明される。(12a) の動詞 *learn* は完了動詞であり、*know* は未完了動詞である。

(12a) He {knows /*learns} the poem.

(12b) He is { *knowing/ learning } the poem (right now).

動詞単純形の文から、(12b) に例示されるような進行形の文に変換される場合の概念的操作は、以下<図1>で表すことができる。



<図1> 単純形と進行形の概念化 (Langacker 2008 : 156 を参照)

現在分詞は、有界のプロセスに対してその内部の一部を取り出し直接スコープ (IS) 内におさめてプロファイルする。言い換えれば、完了事態を未完了化する (imperfectivize) 概念操作であり、直接スコープとして表現されるのは、完了事態の始点と終了点を除いた内部となる。基盤 (ベース base) となるのは有界性の完了事態なので、(12b) に例示されるように、*learn* は進行形になるが、*know* は元々未完了事態を表すので、「未完了化」操作を受けて進行形に変わることはない。⁽¹⁾

<図1> (b) は進行形構文の概念構造をスキーマ的に把握したものであり、この概念構造によって、進行形構文の様々な多義を説明することができる。進行形構文は代表的に以下のような異なる意味を表す。

- | | |
|---|-------------------|
| (13) She's cooking the dinner. 現在進行中の行為 | (Leech 2004 : 19) |
| (14) He was jumping up and down. 反復行為 | (同書 : 24) |
| (15) I'm taking dance lessons this winter. 一時的な習慣 | (同書 : 32) |
| (16) I'm phoning her tonight. 近い未来 | (H&P 2002 : 171) |

(13) は進行形のプロトタイプの用法であり、一つの有界の行為 (cook the dinner) がまさに進行中であることを表す。行為がまだ終了しておらず、終了しない可能性もあることなどが含意される。(14) は反復行為を表す。この場合、基盤となる有界の事態は一回の行為ではなく、同一タイプの行為が複数回集まったものを一回のエピソードとしてまとめて、全体で一つ有界の事態をなしているとみなし、その内部を部分的にプロファイルしている (Langacker 1991: 208-209)。(15) は一時的な習慣を表すが、これも (14) と同様に、複数回を集めてグループ化したひとまとまりの有界の事態を基盤とし、その一部に焦点をあてており、“this winter” という副詞語句によって「一時的な習慣」という解釈に導かれる。(16) は副詞 “tonight” から明らかかなように近い未来を表す進行形であり、(13) や (14) とは異なった概念操作によって基盤となる有界の事態を設定する必要がある。この場合、基盤となる事態は、“phone her” だけではなく、それに先行するプロセス (決心する、計画を立てる、準備を整える) も含め、これら先行行為から電話する行為までを全体としてまとめて上位の完了事態として捉えている。(16) では、主語が明日電話をすると決心した時点でその上位の行為はすでに始まっていると見なすため、「近い未来」という解釈につながる。

このように認知文法による進行形構文の概念構造スキーマは、その多義的な複数の意味を、自然な関連づけを持つネットワークとして説明することを可能とする。しかしながら、本論がテーマとする「行為解説」の進行形構文を、認知文法のアプローチから分析している研究は極めて少ない。次節ではその中で代表的な先行研究 (友澤 2002、2008) を概観する。

4.2 友澤 (2002、2008)

友澤はまず、より一般的な進行形の用法と比較して行為解説用法が特異な特徴を持つことを以下の例で説明している。

(17) When he said that, John was smiling.

(18) When he said that, John was lying.

例文 (17) は、従属節で限定される時間枠で、主語 John は笑っていたということで、従属節の事態が smile という完了事態の中の一部と時間軸において共起することを表す。この場合 smile の始点や終了点は含まれないので、基盤となる完了事態 smile 全体の時間スコープの方が広く、その時間スコープ内に従属節の事態は含まれることになる。一方 (18) の場合は、従属節で表される出来事が、主節動詞 lie (うそをつく) という完了事態の行為の中

の時間的一部分に対応するのではなく、「〔従属節によってあらわされる事象〕がそのまま〔主節によって表される事象〕に相当し、両者は時間的に完全に重なりあう（すなわち、完全に同時である）」（2008：349）ことから、(18)に例示されるような行為解説用法は進行形概念構造スキーマと合致しない、と友澤は指摘する。特に、事象の時間的關係において、従属節の事態構造と主節の事態構造とは等価であるはずなので、後者の事態が進行形を取ってその完了事態の中の一部しかプロファイルされないのでは概念的に矛盾する、という問題点を指摘している。

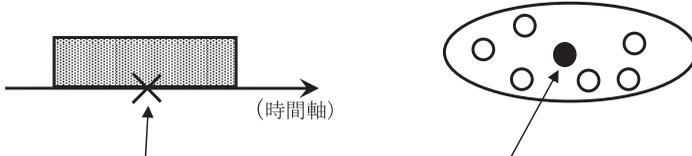
友澤（2002、2008）は、こうした矛盾点を指摘したうえで、認知文法による進行形概念構造とは一見したところ矛盾するようにみえる行為解説用法も、実は他の進行形の諸用法とともに包括的に説明することが可能であると提案する。行為解説用法においては、進行形の時間軸上の包含關係がメタファー的に行為カテゴリーの包含關係に写像されている、と考えることによって、概念的矛盾を解消しようという提案である。(18)において、従属節の「John がそう言うこと」を行為Aとし、主節の「John がうそをつくこと」を行為Bとすると、行為Aは行為Bと等価であり、まったく同一の事象であって、行為Aは行為Bに値すると解説しているのであるから、言い換えれば、行為Aをより上位の行為カテゴリーBにカテゴリー化していることになる。このとき、行為Aは上位行為カテゴリーBのメンバーである。つまりカテゴリーBの中に行為Aは包含される、ということになる。「二つの行為の同一性」というのを「カテゴリーとメンバーの間に成立する（集合的な）包含關係」の一種として捉えることができる」というメタファー關係が提案されている（友澤 2002：156-157）。この場合、メタファー写像の起点領域では、主節中で進行形（be Ving）がプロファイルするVの内的視点の部分（＝解説される従属節中の完了事態（A））と主節の進行形が基盤とする完了事態（B）の間に時間的な包含關係（時間軸における $A < B$ ）が成立する。一方、目標領域では、行為解説の進行形において解説対象となる事象Aと解説において特定される行為Bとの間に、カテゴリー上の包含關係（ $A < B$ ）が成立する。メタファー写像の両領域で「包含關係」という抽象的な概念構造が保持されており、この「包含關係」によって、進行形という文法形式が行為解説機能を持つことが概念的に動機づけられているとされる。このメタファー写像による説明は以下のように図示される。

(a) 時間的な包含関係

(b) 集合的な包含関係

有界的なプロセス (カテゴリーに対応)

カテゴリー (= 該当する事柄)



内的な始点をとる時点 (メンバーに対応)

メンバー (= ある行動や言動)

<図2> 包含関係のメタファー写像 (友澤 2002 : 157 を参照)

<図2>において、(a) は起点領域の時間的な包含関係であり、例文 (17) が自然に合致する。カテゴリー領域にメタファー写像された (b) では、時間的な包含関係は消失して、カテゴリーの包摂関係に変容し、例文 (18) を説明する。

この友澤の提案において問題と思われるのは、時間領域からカテゴリー領域への写像という概念メタファーがどのような概念的動機付けを持つのか、という点である。概念メタファーが存在するなら、それを具体化するメタファー的言語表現が他にも存在すると期待される。しかしカテゴリー構造について言及する際に一般的な表現方法は、以下 (19-20) のような「空間的包含関係」あるいは「容器イメージ・スキーマ」を起点領域とする概念メタファーである。

(19) Are tomatoes in the fruit or vegetable category?

(Lakoff and Johnson 1999 : 51)

(20) ヒトもゴリラも霊長類に入る。 / この程度では失敗のうちに入らない。

さらに、行為のカテゴリー化関係が進行形構文によって表されるなら、以下 (21) が奇妙なのはなぜであろうか。play the piano という行為は、play a musical instrument という行為としてカテゴリー化されるはずである。

(21) ??When she played the piano yesterday, she was playing a musical instrument.

進行形が行為解説的になる場合、単なる行為のカテゴリー化だけでは説明できない要因が、行為 A と行為 B の間に成立し、かつ行為解説という解釈を生じさせるような何らかの背景となる談話構造が関係しているのではないだろうか。時間的包含関係からカテゴリーの包摂関係へのメタファー写像という説明は、進行形の時間領域における概念構造スキーマの特性と、行為解説という機能の特性を、単純に結びつけただけのような感を否めない。メタファー写像を生じさせるような経験的基盤 (Johnson (1999) による “primary scene” など) や概念的動機付けが希薄である。次節において、進行形の行為解説用法で作用している認知プロセスはメタファー的写像ではなく、メトニミー的な把握であり、部分から全体 (フレーム) へのプロファイル・シフトであることを主張する。

5. 考察および提案

5.1 進行形とメトニミー的認知

まず進行形構文の概念構造とスコープの関係を確認する。Langacker (2008 : 62-65) は、事態解釈に関わる要因の一つとしてスコープ (scope) をあげている。言語表現の意味内容の基盤にあり、理解のために必要となる有界的な概念領域がスコープである。言語で表現するために焦点化したり前景/背景化する際、実際に行っているのはスコープ選択である。このスコープには「最大スコープ (maximal scope : MS)」と「直接スコープ (immediate scope : IM)」の区別がある。直接スコープとは最大スコープの中で前景化される部分、つまり注目される部分で「オンステージ領域 (onstage region)」とも呼ばれる。認知文法において例としてよくあげられるのは、たとえば “elbow” (ひじ) という語である。elbow の中心的概念ドメインは human body (人体) であるが、human body はもう少し複雑な身体部位に分かれていて、elbow が直接的に含まれる概念は arm (腕) であり、つまり elbow にとっては arm が直接スコープ、human body が最大スコープとなる。

この最大スコープと直接スコープの関係は、モノについての「部分—全体」階層だけでなく、有界的事態を現す動詞とその進行形との間に成立する概念的対立にも並行的に観察される。elbow の場合はモノが関わる空間領域のスコープであるが、動詞が表す事態構造が関わるのは時間領域のスコープである。完了動詞とその進行形の間には、最大スコープと直接スコープの関係が見出される。Langacker (2008 : 65) は進行形の概念構造とスコープの関係を以下のように述べている。

- (22) Specifically, [the progressive *be... -ing*] “zooms in” and imposes a limited

immediate scope that excludes the endpoints of the bounded event. The composite expression *be Ving* therefore has both a maximal and an immediate scope in the temporal domain: its maximal scope encompasses the entire bounded event, of which only some internal portion falls within the immediate scope. Because the immediate scope is foregrounded, only this onstage portion of the overall event stands out as the composite expression's referent.

動詞の単純形を基盤にして進行形を作るという操作は、基盤となる完了事態を最大スコープとし、その開始点と終了点を除いて焦点化した内部が進行形の直接スコープとなる。これは先に示した<図1>の「未完了化(imperfectivization)」という概念作用である。⁽²⁾ Langacker はこれを“zoom in”作用であるという。

同様にスコープの観点からではあるが、少し見方を変えて、進行形表現を使う場合の情報処理プロセスを考えてみたい。たとえば家族で海辺にピクニックに行き、両親が海辺で砂遊びをしている子供たちを見ているとしよう。母親は傍の父親に、以下のように聞くことができる。

(23) What are they doing?

この場合、実際に見て確認できているのは子供たちが砂で遊んでいるということだけである。したがって父親は、(24)のように答えるかもしれない。

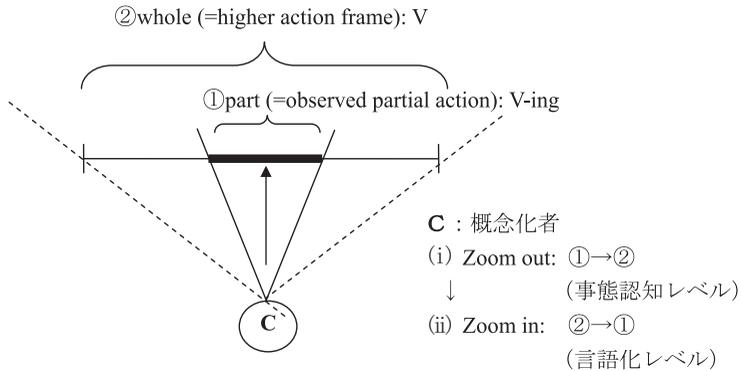
(24) They are digging in the sand.

しかし、「砂を掘っている」というのは現場にいる母親にも同じように認識できる情報なので、父親は推論を働かせて、(25)のように答えることも可能であり、この方が母親にとっての情報価値は高い。

(25) They are building a sand castle.

(25) の概念構造は、先の<図1>(b)に該当する。これを発話する話者の情報処理プロセスに注目してみると、まず事実と確認できるのは、いま目前で子供たちが「砂を掘っている」という事だけである。この情報から話者は何らかの推論を経て、子供たちは「砂の城を作っている」最中だと判断する。つまり、部分的な認知情報(砂を掘っている)をもとに、その行為を

さらに大きなフレーム内に位置づけるとどう解釈できるのか、という推論を行っている。この場合の話者は「砂堀り（部分）」から「砂の城をつくる（全体）」という上位のフレーム構造を頭の中で構築している。この推論での概念作用は、以下<図3>のように図示できる。実際の観察のよって確認できるのは太線の部分的行為であり、さらにこれを「砂の城をつくる」という全体的行為の一部（最中）であると解釈してはじめて、(25)の進行形構文が発話される。まず最初に作用している認知プロセスは、全体的行為である完了事態（V）から進行形による未完了事態（V-ing）への接近（zoon in = ② → ①）ではなく、実は、部分的要素からの全体への概念的な“zoom out”（① → ②）であり、大きなフレーム（最大スコープ）の想定である。これは、実際は部分しか認知できないのに、そこから全体を把握するという概念化である。いったん全体的行為 V（完了事態 = 最大スコープ）が把握されれば、そこからの“zoom in”作用によって、プロファイルする直接スコープ内の事態が捉えられ、未完了化する進行形構文として言語化される。このように進行形の発話には、Langacker のいう“zoon in”作用という点だけではなく、同時に部分から全体を把握するという“zoom out”の意味でもメトニミー的な認知プロセスが関与していると考えられる。



<図3> 進行形の概念化における“zooming out/in”作用
(ex : (25) They are building a sand castle)

5.2 行為の「解説」とは何か—一意図理解

友澤では行為の「カテゴリー化」に着目し行為解説用法が説明された。「カテゴリー化」とは、たとえばある植物を「桜」や「松」に分類することで、ある事例をその上位カテゴリーのメンバーとして認めることである。カ

テグリー化が生態レベルで持つ重要性は、例えばある植物を「雑草」ではなく「野菜」あるいは「春菊」とカテゴリー化することによって、「食べる」という「アフォーダンス」に結びつけることである。カテゴリー化の有用性とは、その結果として私たちが得られるアフォーダンス情報にあるとも言える（佐々木 1994、MacWhinney 1999 など）。

名詞で表されるモノではなく、動詞で表される行為の場合のアフォーダンス情報とは何であろうか。先の(21)に例示したような *playing the piano* を *play a musical instrument* という上位カテゴリーに分類するカテゴリー化では情報価値が低い。むしろ行為カテゴリーの場合、ある行為が何のために行われたのかという意図や目的が重要である。行為とはそれがアフォードする目的を達成するために実行される、と考えられる。ある行為の意図が理解できないということは、その行為が、何のために行われた行為であるのかが理解できないということになる。

行為と意図の関連性について、Iacoboni (2008 : 58) は、人間の行為を「観念運動モデル」の観点から見た場合、「行為の開始点はその行為に関する「意図」であり、大半の行動は、その意図を達成する手段とみなされる」、「自発的行動をするには、まず達成されるべきことを心に思い描くことが必要となる (...the starting point of actions are[sic] the intentions associated with them, ...actions should be mostly considered as means to achieve those intentions. ...voluntary actions require a representation of what is going to be achieved...)」という。また、トマセロ (2008) は、他者が自己と同様に意図をもつ主体であることを理解し、他者の意図を理解すること (intention reading) が、子供の言語習得において最も重要であると指摘しており、子供は 18 ヶ月児ですすでに他者の行動をただ模倣するのではなく、その行動の意図を理解することができるようになるという。

発話行為理論の観点からみると、遂行文ではない多くの発話においてその発話行為 (= 発話意図) は非明示的であり、たとえば (26) の発話はニュースが始まるという知らせ (announcement)、静かにして欲しいという依頼 (request)、一緒にニュースを見ようという誘い (invitation)、あるいはこれらの複数の組み合わせと解釈することができる (Marimariidou 2000 : 189)。

(26) The news is about to start.

Marimariidou (同上 : 186) によれば、実際の発話の基盤にあるのは発話者の伝達意図であり (...underlying what one actually says is one's communicative intent)、また発話意図は、常に言語的に明示されたり予測できたりするわけ

ではなく、さらに聞き手の側の（理解しようとする）貢献がなければ達成されないものである（... this intent is, on the one hand, not always linguistically expressed or predicted and , on the other hand, not fulfilled without the addressee's contribution...）。

相手の発話や行為を理解するという事は、その背後にある意図を理解することと言える。これを行為解説の進行形構文（When X V1, X be V2-ing など）にあてはめると、完結的行為（V1）をその行為の意図（目的）（V2）という観点から捉えなおすような概念化といえる。この場合、V1はV2を達成するための手段行為になっている。行為のフレームの規模から見ると、V1はV2の中に含まれる。⁽³⁾ この概念化は先に<図3>で示した、観察できる部分的な情報から全体の行為を把握することと極めて類似している。観察できるのはV1部分だけであるが、そのV1がどのような上位行為V2の構成要素（手段）となっているのかを表しているのが行為解説の進行形である。以下（27）に、進行形構文が「行為解説」として解釈される条件を提案する。

- (27) 進行形構文（X be V2-ing）の「行為解説」用法は、行為V1（言語的に非明示な場合もある）をさらに大きな上位行為フレーム（V2）を達成するための「構成要素」となる手段的行為と見なすことができるときに、語用論的に創発する機能である。V2は、V1の意図（目的）を指す。

注意されたいのは、V1がV2の「構成要素」というのは、友澤に主張されているようなV1がV2カテゴリーのメンバーであるというタクソノミー関係（分類関係）を成すのではなく、V2を全体的行為（global action plan）としたときにV1がその手段となる構成部分（means component）を成すようなパートノミー（全体—部分）関係を持つ、ということである。友澤では、認知文法の進行形概念スキーマと「行為解説」の概念構造との整合性を保つために「時間の包含関係」から「カテゴリーの包摂関係」へのメタファー写像という概念操作を持ち込んでいるが、本論の提案は、そうしたメタファー写像による時間領域の再解釈を必要とせず、時間領域をそのまま保持し、進行形一般に対する認知文法の概念スキーマをそのまま継承して「行為解説」の進行形を説明しようとするものである。次節で、なぜ意図を指すV2が進行形というアスペクト形式を取るのか、なぜ進行形構文が行為解説という機能に結びつくのかをさらに考察する。

5. 3. 発話行為成立の相互作用性—聞き手の役割⁽⁴⁾

Marimaridou (2000: 189 下線は筆者)は、間接発話行為における聞き手の役割について以下のように言及している。

- (28) ..., it appears that indirect speech acts...rely on inferences arising in context and relating to the contribution made by the addressee, who shares the responsibility of the performance of a particular speech act by verbally or non-verbally treating it as such.

発話行為の成立のためには、発話行為が何らかの意図を持つだけでなく、発話行為をそう解釈し応答する聞き手の側の貢献が必要であり、発話行為は話者と聞き手の間で相互作用的に遂行される (interactionally performed) ものと捉えることができる。発話行為における解釈者としての聞き手の役割に注目してみると、行為解説の進行形は、ある発話行為を聞き手が理解できていない (と話者が判断する) 場合に、発せられる言語形式として捉えることができる。

毛利 (1980: 118-119) が行為解説の進行形としてあげた会話例を再考してみよう。

- (29) I'll be there this evening.
 (30) I am promising to do it!

毛利は、(30) は先行発話 (29) の「発話の「発話内行為」を「あれは<約束だ>と「命名」しているものであり、「命名」は「行為解説」の一種である」と説明している。

しかしこの「命名説」では、なぜ行為解説の (30) が単純現在形ではなく進行形になるのかを説明したことにはならない。重要なのは、(29) の発話行為の首尾よく成立のためには、話し手が発話するだけでなく、聞き手側が会話成立に貢献する、つまりその発話意図を理解する必要がある、という点である。(30) が進行形になるのは、(29) が発話された時点で、この発話の「意図」「目的」 (= promise 「約束する」) が聞き手に理解されていない (と話者が判断した) ため、つまり話者と聞き手の間で「約束する」という行為が成立していないので、(30) でその「意図」「目的」を明示的に提示しているのである。この場合、“promise” という「意図」が聞き手に理解されなければ、その発話行為は首尾よく遂行されたことにはならない。つまり話し手にとって、(29) と (30) を発話している時点では「約束する (promise)」

という目的は達成されていないのであり、したがって (30) は未完了事態を表す進行形にならざるをえない。発話者側の発話 (29) を音声として発するという行為は完了していても、聞き手側の認知状態からすれば「約束がなされた」という完了状態にはなっていない。(30) の進行形は、相手が先行(発話)行為 (29) の意図を理解してくれていないので「約束するつもりで言っているですよ (I'm promising it!)」とダメ押しする発話なのである。

(30) のような例は、行為解説用法で使われる進行形の典型例のひとつと考えられるだろう。発話行為や多くの一般的行為は、その(発話)行為意図を聞き手(相手)が理解して初めて成立する、(発話)行為者と相手との間で相互作用的に遂行される (interactionally performed) ものと捉えることができる。話者と聞き手の間でコミュニケーションが行き詰まった状況で、会話の参加者のあいだで意味の交渉 (meaning negotiation) の一方法として行為解説の進行形が使われる。進行形が使われるのは会話の参加者のどちらかに発話意図が未達成であるという認識があるからである。以下の (31) は(発話)行為者自身が話者で(一人称主語)、自分自身の発話意図を明示する機能を持つ、定着度の高い談話パターンと言える。(32) と (33) は先行発話の聞き手による、相手に対しての発話意図確認であり、二人称主語の疑問文になっている。

(31) I'm just kidding you / I'm begging you / I'm apologizing to you / I'm not blaming you.

(32) 'In thirty-five years Mr Wallis never missed a day before.'

'Are you implying that somebody removed these pages?'

(Dominic Devine, *This is Your Death*, p.58)

(33) 'You're fired'

The older man leaned across the bar, for surely he could not have heard this right.

'You're firing me?'

(Carol O'Connell, *Bone by Bone*, p.235)

5. 4 進行形の持つ「内的視点 (internal perspective)」と「行為解説」機能
進行形が「内的視点 (internal perspective)」という特徴を持つことは、以下のように認知言語学だけではなく伝統的な文法研究でも指摘されている。本節では、進行形の「行為解説」機能では、この「内的視点」という特徴が重要な役割を果たしていることを考察する。

(34) But the Progressive Present is more immediate: it seems to give us an inside

view of a vivid experience of ... (Leech 2004 : 23)

- (35) ..., the progressive is often described as taking an “internal perspective” on an event, as if one is watching it unfold rather than viewing it holistically as a unitary entity. (Langacker 1991 : 208)

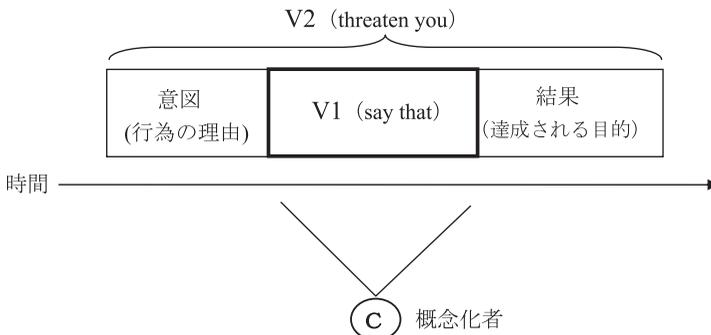
ある行為をどんな行為かと特定するには、その行為によって行為者が最終的に達成しようとしている「行為者の意図する目的」を特定することがその行為の本質を特定することにつながる、と前節で述べた。たとえば以下の例(36)において、

- (36) When he said that he was threatening you.

解説対象の行為 (V1) と、特定される行為 (V2) は次のような関係にある。

- (37) V1 (say that) : 意図した目的 (V2 : threaten you) を達成するために
行った行為者の実際の行為。V2 を達成する具体的な
手段行為
V2 (threaten you) : 行為者の意図。V1 を行った結果として達成される
はずのこと。達成されないこともありえる。

例文(36)を「内的視点」の観点から考えると、以下<図4>のように示される。なぜ行為 V1 を行うのかという理由を考えることは、V1 実行に先立つ行為者の心理状態を、V2 の内部の一部 (開始部分) としてみるから「意図」になるのであって、もし V2 全体を外的視点からみて完了的事態として表せば、それは実現された「結果」から概念化することになってしまう (He threatened you)。



<図4> V2 に対する「内的視点」 (= V1 の再解釈)

V1 を完了事態としてとらえ、その事態を全体的に把握したとしても、その V1 行為がどのような意図や目的を持っておこなわれている行為であるかを認識するためには、行為者の意図を含めたより大きなフレームを想定しなければならない。そのフレーム V2 を、V1 の事態だけから判断するために、話者（概念化者）は、行為者の意図、つまり行為者の心理の内面（internal state of mind）を概念化することになる。一人称主語の場合（I'm just kidding you など）、意図とは自己の内面なので当然知っていて問題はない。一方、上例（36）のように、話者と行為者（主語）が異なる場合には、話者は他者の心の中の意図を「推量」しているだけである。実際に観察して知りえた情報（V1）を、V2 という上位行為の達成のための手段的行為（内部の構成要素）と見なすということは、認知文法でいう時間スコープにおいて V2 に対して「内的視点」を取ることになる（図 4）。また、V1 という観察可能な行為から、その行為者の意図を理解するということは、認知文法の時間領域に焦点化した概念操作というより、むしろ一般的な意味で、行為者の心理状態領域（意図）にアクセスすることになり、いわば行為者に接近して行為者の心理プロセスに焦点化する（＝内的視点を取る）操作としても理解できる。V1（say that）が客観的に観察可能な事態であるとして、その行為者が内心で「君を脅す（threaten you）」ことを意図して発話していたのかどうかは行為者以外には客観的には確かめようもなく、話者が行為者の心理的作用という不可知なはずの情報を推量してコメントしている。このことから、行為解説として解釈される進行形における概念化作用は、主観的（subjective）であり、また話者以外の他者の行為に言及する場合は、推論的（inferential）、認識的（epistemic）でもある。

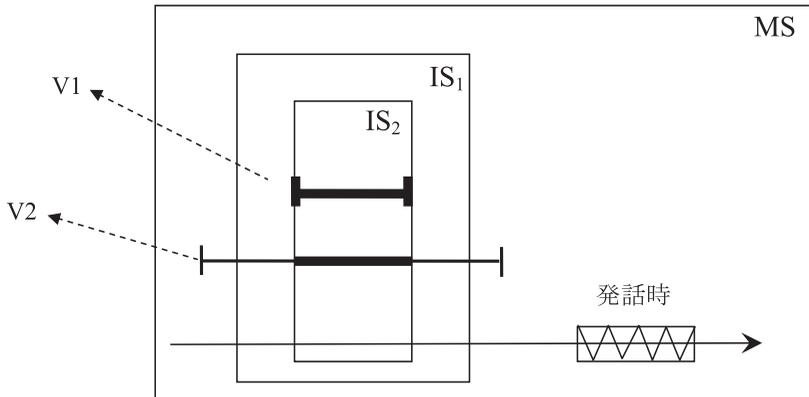
5.5 進行形の行為解説機能のまとめ

これまでの考察にもとづき、本節では行為解説の解釈をうける進行形構文の概念構造が、認知文法における進行形概念スキーマと自然と合致することを示す。

行為解説として頻出するパターンは以下（38）のようにスキーマ化できる。V1 が解説される対象となる行為、V2 が解説において特定される行為である。先行（発話）行為（V1）が言語化されず、非明示的に想定される場合もある（例（31）など）。

- (38) 構文スキーマ： In V1-ing, X be V2-ing
 When X V1, X be V2-ing など（時制指定はなし）
 意味スキーマ： X's act of V1 intends to V2.

具体例を認知文法的に図示すると以下<図5>のようになる（時制を過去に指定）。



<図5> When X V1-ed, X was V2-ing の概念スキーマ

この場合、When 節で特定される時間スコープ内に完了事態 V1 が成立する。それと重複する時間スコープで V2 が進行中であることを意味する。この図は、行為解説とは解釈されない同じ形式の文 (3)、(4) も適切に説明する。その場合、V1 と V2 は時間軸において重複するが二つの別個の行為である。一方、行為解説として解釈される文では、主語が同一だけではなく、意味的に「V1 の行為は実は V2 であるのだ」という、行為 V1 を別の行為 V2 として説明するような解釈がされる。それは V1 が、V2 という意図を達成する具体的な手段行為となっており、かつ場面の参加者が意図 V2 を理解していないために、相互作用的にみれば行為 V2 が達成されていないと発話者が捉えるので、結果として V2 は未完了の進行形によって表されるということになる。ここで明らかなのは、行為解説機能は、談話という相互作用的場面で、話し手と聞き手が意味の交渉をするために、一般的な進行形概念構造を利用しているにすぎず、したがって行為解説機能は他のより典型的な進行形の用法と自然な連続体をなしているということである。行為解説という機能が特殊な用法クラスターとして特異的に顕著なグループを成すとすれば、それは実際の言語使用場面から創発的に生じている機能に由来すると言える。

6. いくつかの伝統的文法書の記述について

6. 1 Leech (2004)

Leech は、例文 (1) に関連して、(39) のように述べて、

(1) Were you lying when you said that? (再掲)

(39) This is sometimes called “interpretive” use of the Progressive: it is as if we are seeing the speech act “from the inside”, not in a temporal sense, but in the sense of discovering its underlying interpretation. There is no temporal-frame effect here, as the “lying” and the “saying” are apparently coextensive in time. (p.22、下線は筆者)

進行形を使うことによって、発話行為を「内側から」見ているようで、それは時間的な意味ではなく、「隠れた意図を発見する」という意味合いを持ち、この進行形は時間的フレームを与える効果を持たない、と指摘している。しかしながら、行為に対して内的視点を取ることが、「意図」を推量することなのである。意図とは、すでに完了した行為の結果状態ではなく、行為に内在する心的態度であり、主観的で、他者の視点からは推論的であり、かつ状態的 (state of mind) である。行為解説の進行形においては、時間領域での未完了性から行為者の意図 (心的内面) へと意味の焦点化が移動するような、ある種のプロファイル・シフトが生じていると言える。

6. 2 Huddleston and Pullum (2002)

友澤 (2008) が棄却した H & P (2002: 165、下線は筆者) の以下の指摘も、本論の提案に即せば、部分的に妥当性を認めることができる。

(2) When I said ‘the boss’ I was referring to you. (再掲)

(40) The progressive is not required here but is more usual than the non-progressive; the internal (imperfective) view is appropriate to the explanatory function of the clause—in emphasising duration, the progressive metaphorically slows down or extends the situation in order to be able to focus on clarifying its nature.

H & P は「メタファー的に」事態の進行を遅らせる、あるいは引き伸ばしているというのだが、これはメタファー的にではなく、(2) においては文字通りに refer to you という意図は「未完了」として把握されるのである。(40) の下線部後半で H & P が「その事態の本質的性質 (nature) を明確にするこ

とに焦点があたるよう」に、進行形によって事態を引き伸ばしてその事態に対して内的視点を取る、と言っているのは、これまで本論で主張してきたように、例文(2)における先行発話行為(I said 'the boss')の段階で聞き手(you)にその発話行為の意図(refer to you)が理解されておらず、発話の目的が達成されていないがために、refer to youは発話者によって未完了事態として概念化され、その概念構造を忠実に反映する進行形によって表現されているのである。手段的行為は完了しても、意図達成も含めた行為連鎖全体としてみれば「未完了」であることが含意され、達成されていない「意図・目的」を相手に知らせる言語形式は進行形となり、「行為解説」という機能を持つのである。したがってH & Pによる(40)の、「メタファー的に(metaphorically)」という指摘は、本論の主張に従えば「メトニミー・プロセスによるプロファイル・シフト」と修正されるべきであるが、(40)は「行為解説」するために進行形を採用する理由を直感的に述べた記述としては、一つの側面を的確に指摘していると言える。

7. 間接発話行為の解釈におけるメトニミー認知

発話行為理論において、以下(41-43)の発話は「間接発話行為」と呼ばれる。発話内行為を明示的に表わしていないが、ある種類の構文形式が慣習的にある特定の発話内行為と結びついており、遂行文との対比から「間接的」と言われる。

- (41) Can you shut the door?
- (42) Will you shut the door?
- (43) Would you mind shutting the door?

発話行為理論の中には、こうした間接依頼表現を個別言語における慣習化、あるいはイディオム表現として扱う研究もある。一方、概念化作用や認知メカニズムに言語現象の動機付けを求める認知言語学の中では、間接発話行為を認知メカニズム、特にメトニミー認知作用と結びつけて分析している研究がある(Gibbs 1994: Ch.7, Gibbs 1999など)。Gibbs(1994: 352)は間接発話行為について以下のように述べている。

- (45) [S]peaking and understanding indirect speech acts involves a kind of metonymic reasoning, where people infer wholes (a series of actions) from a part.

Gibbsによれば、(41-43)のような発話が間接的に「依頼」を表すのは、話者が「依頼」という行為を達成するまでの一連の行為連鎖において、依頼の成立を妨げるような状況がないかどうかを確認する発話内容になっている為である。聞き手が上記(41-43)の発話を、話者が意図したように「依頼」として理解できるのは、これらの発話が「依頼」行為という全体的行為連鎖の一部分（依頼がうまくゆく条件）の確認になっている、と理解するからである。Gibbsは、話者だけではなく、解釈における聞き手の側の役割を指摘しており、また間接発話行為に関する多くの研究が「間接発話行為の使用とその理解における、メトニミー的思考の重要性（the importance of metonymic reasoning in people's use and understanding of indirect speech acts）」を指摘していると言う。

しかしながら、発話意図の解釈に至るメトニミー的認知は「間接発話行為」として慣習的に分類されるような構文形式だけに当てはまるものではなく、意図や目的が明示的でない（発話）行為一般にすべて該当すると考えられる。進行形構文の「行為解説」用法は、そうした意図理解の認知作用、つまり先行（発話）行為から、その上位の全体的行為フレームを特定するという、部分から全体へのメトニミー的認知メカニズムに基づくものであると本論では主張した。

8. おわりに

本論では、進行形構文の中で特異な用法と指摘されている「行為解説」用法を取り上げ、その先行研究を概観し問題点を示した。さらに、認知文法における進行形を包括するスキーマ的概念構造に基づき、他のより典型的な進行形の用法と連続するものとして、行為解説機能に対する概念的・機能的な説明を試みた。

行為とは行為者の意図と密接に結びついており、行為の理解にはその意図を理解することが重要である。このことから、行為解説の進行形とは、先行する（発話）行為を、意図する目的を達成するための手段行為として把握する、という概念構造を表すものであると結論づけた。進行形という未完了アスペクトを取るのは、話者と聞き手との間の相互作用として発話行為を考えた場合、聞き手がその意図を的確に解釈していないことが、その行為自体がまだ達成されていないことを意味し、よって未完了を示す進行形が採用されると指摘した。また行為解説の進行形概念化には、実際に観察される行為から、全体的行為へアクセスするメトニミー的認知が関与していること、さらに間接発話行為に代表される意図非明示型の発話の伝達意図の解釈にもメトニミー認知が同じように関与していることを述べた。

認知言語学は言語使用者の概念化作用や認知能力に言語現象の動機づけを求める研究アプローチである。いままで語用論の分野で中心的に研究されてきた言語使用の相互作用的・社会的な側面にも、認知言語学の知見を積極的に援用することで、さらに新たな洞察が得られるのではないかと考えている。

注：

(1) <図1>では時制指定を省略している。現在進行形あるいは過去進行形のように時制が特定された場合、発話時が時間軸上に指定される。

(2) 認知文法では、名詞表現 (arm - elbow) と、動詞表現 (単純動詞 - 進行形) の間に並行的なスコープ関係 (全体と部分) を認めているが、この並行関係は完全に一致するわけではない。この場合に重要な違いは、arm と elbow の場合はどちらのスコープも独自の語によって語彙化されているのに対し、動詞の場合は、単純形だけが語彙化され、進行形は文法的形式によって派生的に作られており、単純動詞形から概念的に独立してはいない、という点である。これは、進行形で表される事態が、単純動詞で表される行為概念に依存しないと表現できない、という認知的・概念的制約の表れである。

(3) 行為と意図 (intention) の詳細な因果関係については Verspoor (1996) を参照。

(4) 語用論研究においては、発話者だけでなく、解釈において聞き手が果たす役割の重要性は広く認められている。たとえば Marmaridou (2000 : 204) は “illocutionary force is viewed as an emergent context sensitive effect of the manipulation of propositional content by speaker and addressee rather than a reflection of speaker intentions” と言い、発話内の力とは話者と聞き手の相互作用から生じるものであるとし、話者の意図だけで決まるものではないと指摘している。認知言語学においては、Gibbs (1994)、Croft (1994, 2009) が言語現象における聞き手の役割、社会的認知の視点の重要性を強調している。Verhagen (2005) は、認知文法においてグラウンド (G) としてひとくくりされる話者と聞き手を、別個の独立した存在として扱い、概念化においてそれぞれが果たす異なる役割に注目することで明らかになる言語現象について論じている。

参考文献：

- Blank, Andreas (1999) “Co-presence and succession: a cognitive typology of metonymy.”
In Klaus-Uwe Panther and Günter Radden (eds.), *Metonymy in Language and Thought*.
John Benjamins, 169-191.
- Croft, William (1994) “Speech act classification, language typology and cognition.” In S.
Tsohatzidis (ed.), *Foundations of Speech Act Theory: Philosophical and Linguistic
Perspectives*. Routledge, 460-477.

- Croft, William (2009) "Toward a social cognitive linguistics." In V. Evans and S. Pourcel (eds.), *New Directions in Cognitive Linguistics*. John Benjamins, 395-420.
- Gibbs, Raymond W. (1994) *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*. Cambridge University Press.
- Gibbs, Raymond W. (1999) "Speaking and thinking with metonymy." In Klaus-Uwe Panther and Günter Radden (eds.), *Metonymy in Language and Thought*. John Benjamins, 61-76.
- 長谷川存古 (2005) 「いわゆる「行為解説の進行形」の概念構造について」『英語のテンス・アスペクト・モダリティ』東京 英宝社.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge; Cambridge University Press.
- Iacoboni, Marco (2008) *Mirroring People: the Science of Empathy and How We Connect with Others*. New York; Picador.
- Johnson, Christopher (1999) "Metaphor vs. conflation in the acquisition of polysemy: the case of see." In Hiraga Masako, Chris Sinha and Sherman Wilcox (eds), *Cultural, Typological and Psychological Issues in Cognitive Linguistics*. 155-170.
- Lakoff, George and Mark Turner (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York; Basic Books.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol.2. Descriptive Application*. Stanford; Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Berlin; Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York; Oxford University Press.
- Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English Verb*. 3rd ed. Harlow; Pearson Education.
- MacWhinney, Brian (1999) "The emergence of language from embodiment." In B. MacWhinney (ed.), *The Emergence of Language*. Mahwah; Lawrence Erlbaum Associates. 213-256.
- Marmaridou, Sophia S. A. (2000) *Pragmatic Meaning and Cognition*. Amsterdam; John Benjamins.
- 毛利可信 (1980) 『英語の語用論』東京 大修館書店.
- 大江三郎 (1982) 『動詞 (I) 講座・学校英文法の基礎 第4巻』東京 研究社.
- 佐々木正人 (1994) 『アフォーダンス—新しい認知の理論』東京 岩波書店
- Searle, John R. (1975) "Indirect speech acts" In P. Cole and J. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York; Academic Press. 59-82.
- トマセロ、マイケル (2008) 『ことばをつくる—言語習得の認知言語学的アプローチ』東京 慶応義塾大学出版
- 友澤宏隆 (2002) 「英語進行形の概念構造について」『認知言語学 I : 事象構造』東京 東京大学出版会 137-160.

- 友澤宏隆 (2008) 「行為解説の進行形概念構造について」『日本認知言語学会論文集』
第8巻 347-356.
- Verhagen, Arie (2005) *Constructions of Intersubjectivity: Discourse, Syntax, and Cognition*.
Oxford; Oxford University Press.
- Verspoor, Marjolijn (1996) “The story of -ing: a subjective perspective.” In M. Putz and R.
Dirven (eds.), *The Construal of Space in Language and Thought*. Walter de Gruyter, 418-
454.